

仙台市文化財調査報告書第26集

史 跡 遠 見 塚 古 墳

昭和55年度環境整備予備調査概報

昭和 56 年 3 月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第26集

史 跡 遠 見 塚 古 墳

昭和55年度環境整備予備調査概報

昭和 56 年 3 月

仙 台 市 教 育 委 員 会

序

仙台平野には数多い古墳が分布しています。最近の古墳文化研究の進展によりまして、幾内を中心とする中央に栄えた古墳文化と比較してあまり時期差がなく伝播していることも解明されつつあります。東北で最も古いとされる古墳は、福島県会津にある大塚山古墳が4世紀後半、仙台的遠見塚古墳が5世紀前半とこれに次いでおり、名取市の雷神山古墳は規模では全長168mを誇る東北最大の古墳ではありますが、時代的には5世紀の中頃とされています。

このように仙台市遠見塚一丁目にある遠見塚古墳は、規模では東北地方第3位、年代的には2番目に古いものであり、東北南半地方における古墳文化研究の貴重な資料となっているものであります。遠見塚古墳は昭和43年に国の史跡に指定されて以来、古墳の永久保存、管理のために史跡の買上げ及び環境整備の事業を実施してまいりました。

本書は古墳の前方部と後円部の接点を中心とする墳麓線確認のための第5次調査の概要を記述したものであります。

この古墳の環境整備事業が完了するまでは少々時間がかかりますが、将来は史跡陸奥国分寺同様、一大史跡公園として市民に公開されることになっています。今後ともこれら貴重な文化遺産の保護保存に対し、皆様方の一層の御協力を賜わりますことをお願い申し上げますとともに、広く学兄諸氏の研究にまた市民各位の文化財愛護に御活用いただければ幸いに存じます。

仙台市教育委員会

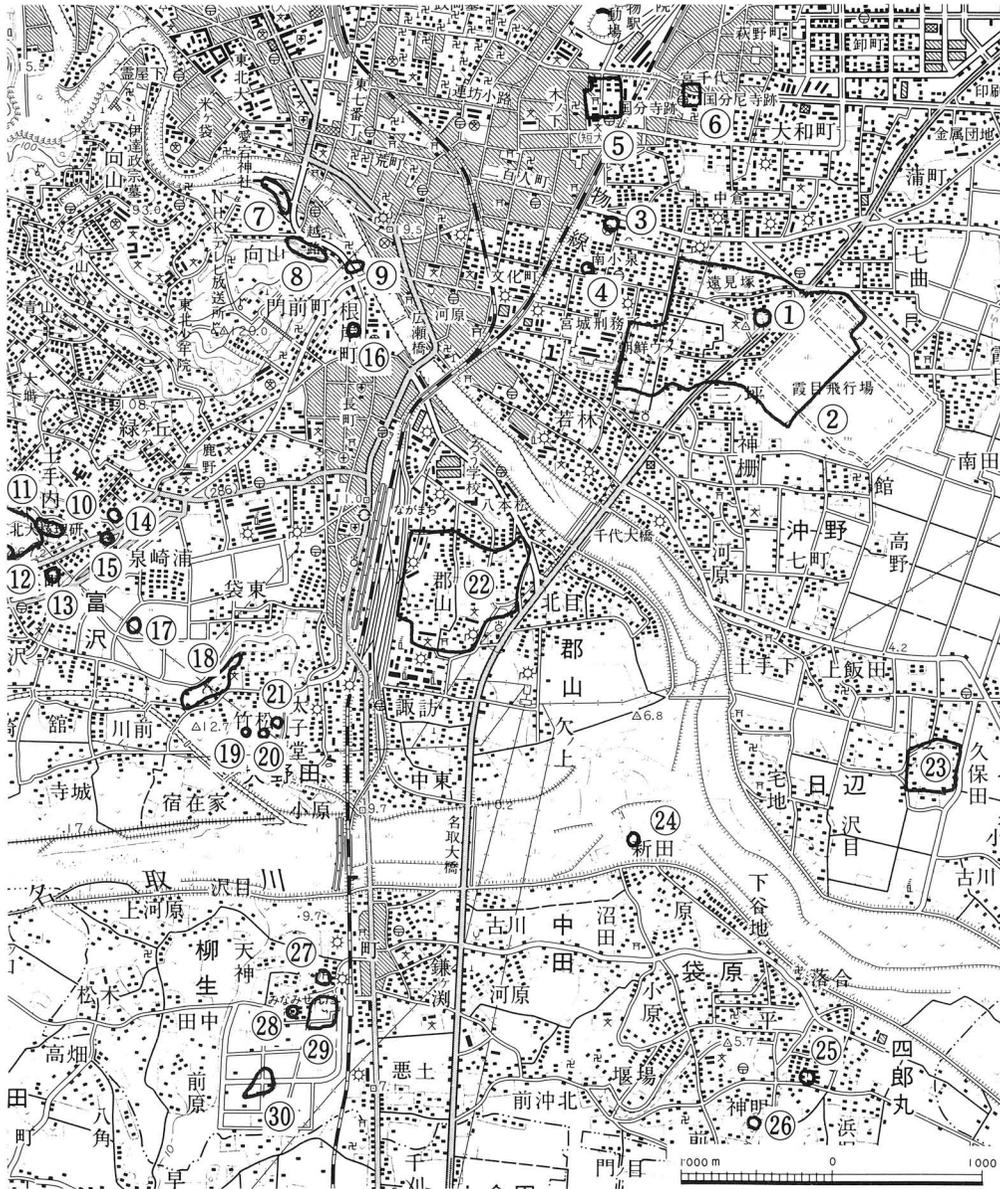
教育長 藤 井 黎

例 言

1. 本書は国庫補助事業（総額 4,000,000円）の環境整備工事に伴う調査概報である。
2. この報告は、昭和50、51、53、54年度に続く第五次の発掘調査概報である。
3. 本書は、調査の経過、調査概要の記載に重点をおき、考案は若干である。
4. 調査に当っては、東北大学名誉教授伊東信雄氏、宮城県教育庁文化財保護課課長氏家
和典氏の御指導をいただいた。
5. 出土遺物のうち、弥生土器について東北大学助教授須藤隆氏に御助言をいただいた。
6. 土色は農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人・日本色彩研究所色票監修の新
版標準土色帖を使用した。
7. 地形図は建設省国土地理院発行の5万分の1「仙台」を使用した。
8. 本書の執筆、編集は工藤哲司が担当した。
9. 本調査は、昭和55年9月に着手し、昭和56年3月31日に全ての事業を終了した。

本 文 目 次

I. 第五次発掘調査要項	2	V. 出土遺物	10
II. 古墳の位置と環境	2	1. 突帯のある土師器	10
III. 調査経過	3	2. 弥生土器	14
1. 第四次までの調査経過	3	3. 石器	14
2. 第五次調査の経過	5	VI. まとめと考察	16
IV. 調査概要	8		
1. 前方部の状況	8		
2. くびれ部の状況	8		
3. 周塹の状況	10		
4. 古墳以外の遺構	10		



第1図 仙台中南部の古墳時代中心の遺跡分布図

- | | | |
|-------------------|------------------------|---------------------|
| 1. 遠見塚古墳 | 11. 三神峯遺跡(小円墳二基含む) | 21. 王ノ壇古墳 |
| 2. 南小泉遺跡(集落) | 12. 富沢窯跡 (埴輪窯一基含む) | 22. 郡山遺跡(郡衙?) |
| 3. 法領塚古墳(円墳・横穴石室) | 13. 裏町古墳 (前方後円墳) | 23. 今泉遺跡(集落) |
| 4. 猫塚古墳(小円墳) | 14. 砂押古墳 (円墳) | 24. 大塚山古墳(円墳) |
| 5. 陸奥国分僧寺 | 15. 金洗沢古墳(円墳) | 25. 城丸古墳(円墳) |
| 6. 陸奥国分尼寺 | 16. 兜塚古墳(前方後円墳) | 26. 弁天冢古墳(円墳) |
| 7. 愛宕山横穴群 | 17. 教塚古墳(円墳) | 27. 伊豆権現古墳(円墳) |
| 8. 大年寺横穴群 | 18. 六反田遺跡(円墳1、石室1、木棺1) | 28. 安久諏訪古墳(円墳、横穴石室) |
| 9. 宗禪寺横穴群 | 19. 春日社古墳(円墳) | 29. 安久東遺跡(方形周溝墓1基) |
| 10. 土手内横穴群 | 20. 鳥居塚古墳(円墳) | 30. 栗遺跡(集落) |

I. 第五次発掘調査要項

調査目的 環境整備に先行する前方部東側内縁の確定のための調査

調査面積 327㎡（仙台市遠見塚一丁目23-10外）

調査期間 昭和55年9月24日～11月18日

調査体制

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係

（課長）永野昌一（主幹）早坂春一

（係長）鈴木昭三郎（主査）鈴木高文

（主事）工藤哲司 金森安孝 篠原信彦

調査指導 伊東信雄（仙台市文化財保護委員、東北学院大学教授）

氏家和典（宮城県教育庁文化財保護課課長）

調査補助員 森剛男

調査参加者 小林広美 白井一夫 木村一之 真中信三 渡辺紀雄 佐々木裕一

邦武英彦 和田道治 浅田睦彦 真山尚幸 庄司裕子

II. 古墳の位置と環境

遠見塚古墳を含む南小泉地区一帯は、仙台平野を形成している深沼層、霞ノ目層、福田町層、岩切層のうち霞ノ目層に当たる。霞ノ目層（層厚1～5m）は現世につづく氾濫原で、内陸部の最上部を占めている。この層は土器、石器、植物種子を含む偽層砂岩、ローム層からなっていて、霞ノ目飛行場周辺に典型的に発達している。（註）

古墳は仙台駅の東南約3.7kmの遠見塚一丁目地内の、広瀬川北岸に発達した標高10m前後の自然堤防上にある。古墳の周辺は、弥生時代から平安時代に渡る南小泉遺跡と呼ばれる大集落跡であり、ここから出土した古墳時代の土器の一部は南小泉式と呼ばれ、県内の古墳時代中期・5世紀頃の標準土器となっている。

仙台市内における古墳文化の原初とみられるのは安久東遺跡の方形周溝墓であるが、やがて弥生時代以来発展して来た南小泉の集落を背景として、遠見塚の地に市内最古、最大の古墳が造営されたと考えられる。その後、古墳造営の中心は富沢地区に移り、埴輪を有する前方後円墳、円墳が多く見られる。以後は、横穴石室を内部主体とする古墳や小型の円墳が市内各地に散在するようになり、土手内や、向山周辺に横穴群が形成されていった。

遠見塚古墳の近くには、法領塚古墳、猫塚古墳、陸奥国分二寺等の遺跡があり、恵まれた歴史的環境にあるが、反面遺跡周辺は宅地化が進行しつつある。

(註) 奥津春生「大仙台圏の地盤、地下水」 昭和48年参照

III. 調査経過

1. 第四次までの調査経過

遠見塚古墳は、昭和22年に進駐軍による霞ノ目飛行場拡張工事に伴い後円部北半部が削平され、粘土槨が露出した。この際、伊東信雄氏による最初の調査が行なわれた。その後、遠見塚古墳は宮城県内第2位、東北第3位の規模をほこり、東北でも古型式のものとして注目されて来たことから、昭和43年11月8日付けで国の史跡に指定された。指定後は昭和43年から48年までに、国・県の補助を受けて土地の公有化を行ない、さらに昭和50年度より買収後の古墳の永久保存、管理のための史跡環境整備事業を実施し、これに伴う事前調査を行なって来た。次表は各年度別の調査経過とその成果をまとめたものである。

表-1 遠見塚古墳の調査経過

調査年度	トレンチ番号	調査目的	調査成果
昭和22年度		土採り削平に際しての緊急調査	①古墳全長 110m、後円部幅57m（復原62m） 前方部幅 30m（復原38m） 後円部高 6.7m 前方部高 2.5m ②内部構造—主軸に平行する粘土槨2基 ③副葬品—土師器壺1個
50年度	1 3	①周湮の有無、形態、規模の確認 ②古墳西側に見られる低い壇の性格 ③実測図の墳形の歪みの原因	①周湮は平面形が馬蹄形、幅は前方部で20m、後円部で21mを計る。第1トレンチでは深さ4m ②壇は近世以降に古墳西側を削平して生じた。 ③墳形は従来考えられた「柄鏡型」ではなく、現状より幅が広い。 ④主軸 107m、後円部直径61.5m（推定）（現状55m） 前方部幅35m（推定）（現状28m）、接点部幅22.5m（推定）（現状20m）
51年度	4 7	①古墳後円部北～東側周縁部の周湮の確認	①後円部北では22mの周湮を確認したが、北東側、東側では幅28m以上、42mと幅広くなっている。 ②周湮の深さは1.5m前後の長い逆台形を呈す。

51 年 度	4 ～ 7		③墳麓部は各トレンチで後世の攪乱が認められ、今後の調査によって墳形、規模の判定が現状と異なることが考えられる。
	8	②昭和22年に削平された後円部中央断面の観察	④後円部中央には、墳頂から掘り込まれた幅11m 深さ 1.2m の墓壇の底面に、軸線方向に平行する2基の粘土槨が観察された。粘土槨の間には朱塗りのものを含む河原石を敷いた部分がある。
52 年 度		<p>(氏家和典氏「東北における大型古墳の企画性と編年」発表)―昭和53年3月(註-1)</p> <p>1. 第2次までの調査成果では、後円径(BC)：前方部後長(CP)：前方部前長(PD)は6：2、5：2と考えられる。</p> <p>2. 前方部西半部の調査資料では前方部西側墳麓線の延長線は後円部の中心に向っている。おそらく東側墳麓線も同様と推測でき、前方部両側墳麓の延長線は、後円部背後のB点ではなく、後円部の中心の0点で交わるものであろう。</p> <p>3. 前方部前端幅は現状では4.5単位とみることが可能である。従って前端幅の後円部径に対する百分比は従来推定値61～63%程度にとどまらず75%になろう。</p> <p>4. 周遶部は主軸に直交して後円部中心を通る線上では、西側周遶幅が2単位であるのに対し東側では4単位、後円部背後の主軸線上では2単位となっている。</p> <p>5. 周遶のいびつさは、何に起因するか現資料では明らかではないが、第一次調査の際、西側に設定した3本のトレンチ断面では、周遶外縁をすぎてまもなく再び掘り込みがみられていることでもあり、あるいはこの部分が周庭帯で、東側については後世あとかたなく撤去されたと理解するか、または東側の周遶が後世別な用途で拡張されたと解するのか、いずれであろう。とにかく、周遶に規則性を見出しえたことは大きな成果である。</p> <p>6. 周遶平面形は尖端のすぼまる馬蹄形型の変形であろうか。</p>	
	53 年 度	9 ～ 10	①前方部東側墳麓線の確定 ※遺構確認面上の平面調査
11		②前方部前面の側縁の確定	④古墳の設計の基本となっているのは、後円部の中心点0を中心とする半径3単位の円と底辺4単位、高さ4単位の三角形である。 ⑤前方部西側の墳麓線は後円部の中心点0で交わるが、東側の墳麓線は後円部北端のBで交わるという差が生じた。
11 ～ 14		③二重周遶の可能性の検討	⑥古墳西側で周遶の外に確認されていた落込みは二重周遶の外濠でといえるものではなく、自然の溝であった。 ⑦周遶幅が東側で約40m、西側で約20m、11トレンチでは周遶外縁が墳麓に沿って曲がらず逆に反ってしまったこと深さがまちまちであることを考えると、周遶に規格性がなく、古墳造営に当って周囲から土を採取して溝状になったものを整形して周遶としたものと思われる。

54 年 度	15	①第5と第7トレンチ間の周隄外縁の確認	①想定線と異なり、トレンチは周隄内の設定した状況であり、立ち上りはより外方と考えられる。
	16	①第12と第5トレンチ間の周隄外縁の確認	①自然の溝内に設定したと考えられ、周隄の立ち上りは第16トレンチと第4トレンチの間であると考えられる。 ②周隄外縁の不規則性が強まる結果となる。

以上のような各年度の調査成果をもとに今年度の調査目的を検討した結果、前方部西側墳麓線が後円部の中心点（O）で交わり、前方部東側墳麓線が後円部の北端（B）で交わるという差異がいかなることに起因するか、あるいはどちらが信頼できるものかを明確にするための調査を行なうことにした。このため、昭和53年度の第9、第10トレンチと重複するトレンチを墳麓に沿って設定し、さらに前の調査では、周隄の落ちを確認面でおさえたのに対し、今回の調査は周隄内縁の底面を検出することにより、前方部墳麓線がどの点に交わるか調査することになった。（第8図参照）

2. 第五次調査の経過

第17トレンチは、測量基準線より6m東よりに平行して、E-8より北5mのところからE-10より南6mまでの長さ31m、幅9mのトレンチに、北側と中央に幅3m、長さ8mのサブトレンチを設定して調査を行なった。

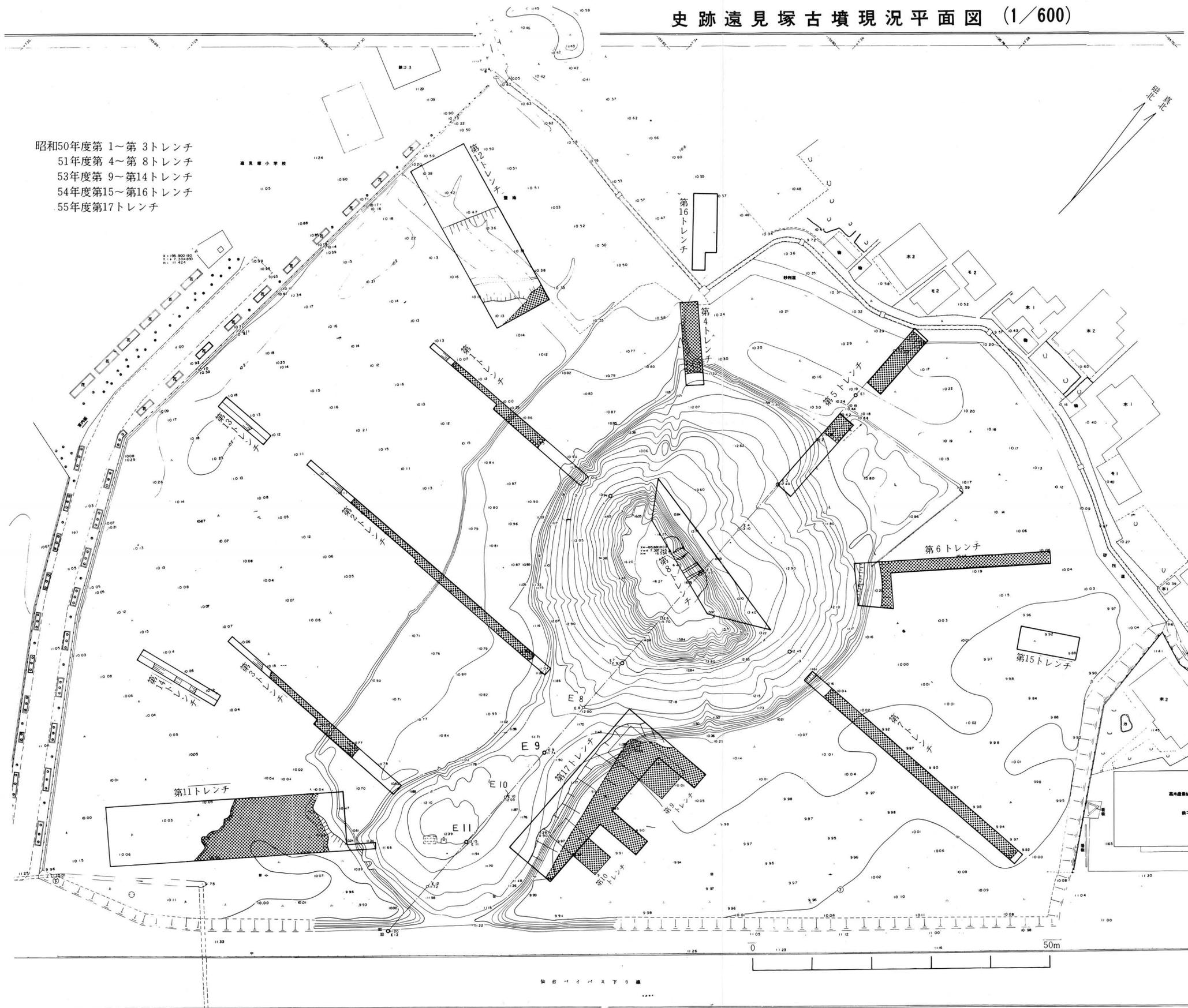
表土の排土は、第9、第10トレンチの調査記録をもとに旧耕土、旧田床土層まではバックホーの機械力によって行なった。

表土排土後は遺構確認面まで手掘りで下げ、表土下70cm前後で確認面に達した。周隄の上端は墳丘の上場より1m前後下がった面で、この面上では溝1条（1号溝）と1～3号土壙と井戸が1基確認された。

調査はまず1号溝および1～3号土壙の記録を取った後、トレンチ南端より北端までの間にほぼ等間隔に幅1.5mのサブトレンチを5ヶ所に設定し、周隄の立ち上がりと前方部墳麓線の調査を行なった。また、くびれ部も周隄底面まで掘り下げを行なった。サブトレンチ以外の周隄部は、周隄上端から1号溝までの間を20cm程度下げるに留めた。墳丘は積土状況を観察するために、南端と北端を幅40cmで切断し、旧表土層も掘り下げた。また、前方部と後円部の境付近も旧表土上面まで切断して土層を観察した。

史跡遠見塚古墳現況平面図 (1/600)

昭和50年度第1～第3トレンチ
 51年度第4～第8トレンチ
 53年度第9～第14トレンチ
 54年度第15～第16トレンチ
 55年度第17トレンチ



2図 古墳全体図

VI. 調査概要

1. 前方部の状況

古墳前方部上面は、南側で表土下50cm、北側では70cm程度で確認される。上面は東西方向に走る凹凸が観察されるが、これは公有化以前の耕作の天地返しによるものと考えられる。墳丘の上端線は、地表面で観察された時点より1~1.5mほど主軸線に近くなるが、地表観察の線とほぼ平行する。旧表土面上に墳丘は築かれているが、積土の保存状況は良くなく、薄い所では10cmに満たない。厚い所でも70cm程度である。

斜面は表土層、耕作により墳丘上面から運ばれた崩壊土層が厚く堆積していた。墳丘の傾斜は40~50°で検出されたが、これは耕作により削られた結果であって、古墳の原状を反映するものとは言えない。墳丘斜面には、旧表土層が10~30cm程の厚さで帯状に観察される。旧表土中の遺物が多いが、弥生土器、石器がほとんどで、現在のところ土師器は認められていない。旧表土層の下面から周湟の確認面までは、50cm程度のレベル差で地山層が切り出されている。墳丘斜面の下端線は、上端の線とほぼ平行している。

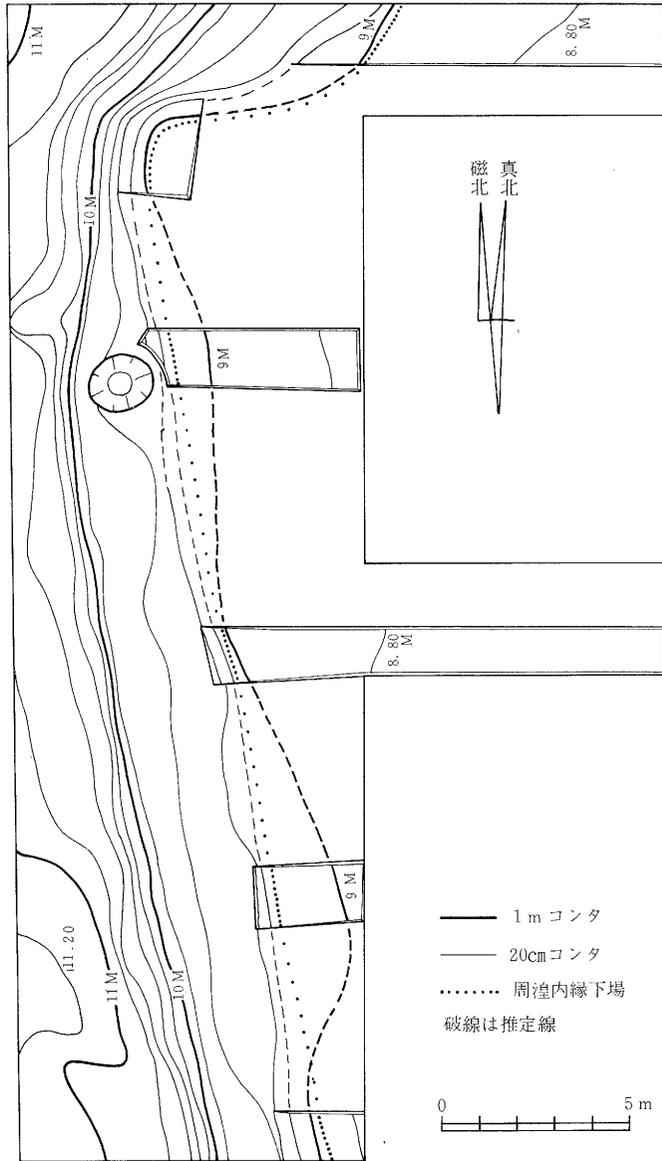
墳丘の下端から周湟の上場までの間には、くびれ部の南方4mの所からトレンチ南端までの間に1~2.5m幅の平坦面がある。旧表土上面からこの面までの深さは70~100cmある。この平坦面は段築等と考えられるものではなく、土層観察によれば、周湟側から墳丘に向かって行なわれた水田の拡張のため墳丘が削られて生じたものと判断される。従って、本来は現周湟上端線より現墳丘上端線の間も地山層、旧表土層、墳丘積土が存在していたと考えられ、この間に本来の墳丘の上端があったのであろう。

墳丘の積土は、黄褐色粘土を主体とし、これに黒褐色粘土が多少混入している。後円部と前方部では積方に差異が見られ、後円部（トレンチ北端部）は、ほぼ全体的に広い水平層であるのに対し、前方部（トレンチ南端部）では、周湟側から中軸方向に段階的に積まれている。

（第4図-1・3参照、①→④の順に積まれる。）しかしながら、前方部と後円部の接点部分においては積方に差異を認めることはできなかった。（第4図-4参照）

2. くびれ部の状況

くびれ部は水田拡張による平坦面もなく、調査範囲中では最も保存が良い。現墳丘上端線は、周湟の上端線と一致し、斜面は周湟の内縁下端より35°前後で立ち上り、等高線も整っている。斜面の下半部には、地山層と区別が付き難いが、土師器片を含む層や、墳丘斜面に沿ったシルトの薄い層などの古墳崩落土と考えられる層が認められたことから、この部分は古墳の原状をかなり残していると考えてよいと思われる。



第3図 遠見塚古墳前方部東麓等高線図

3. 周湟の状況

周湟の上端線は、先述のように現在の墳丘上端とはくびれ部以外では一致せず、一段低い平坦面が周湟の上端となっている。現周湟上端線は、現墳丘上端線および下端線とは平行せずに、第2サブトレンチと第3サブトレンチの間で外側に向く脹みをもっている。傾斜面は30°~40°程の角度で、中程が凹む斜面となっている。底面は小さな凹凸はあるが概ね平坦な底面である。堆積土は、上層部では水平な状態であるが、下部及び壁近くでは入り組んだ状態であった。

周湟の深さは、第3サブトレンチの横断面で計ると、墳丘地表面より1.6m、確認面より0.7m、周湟部地表面より1.2mある。

第1サブトレンチから第4サブトレンチ及びくびれ部トレンチの周湟内縁下端線はほぼ一直線上に並び、その後円部方向への延長は、後円部北端で中軸線と交わる。

4. 古墳以外の遺構

(1号溝) 墳形線と平行して、現墳丘下端より3m程離れて巡る。上幅60~90cm、底面幅30cm、深さ30cmを計る。周湟堆積土の最上層より確認される。古い用水跡と考えられる。

(井戸跡) 第4サブトレンチ付近で検出された平面円形の素掘り井戸である。上面直径1.6m、底面直径0.9m、深さ2.4mを計る。下部3分の1は自然崩落土層、その上部は人為的堆積層となっていた。時期については、判定資料がなく不明である。

(1号土壙) 直径約80cm、深さ20cmの略円形の土壙である。時期、用途とも不明である。

(2号土壙) 長軸120cm、短軸90cmの平面楕円形の土壙で、深さは65cm、底面は舟底状を呈す。8層上面よりこぶし大の石が数個出土した。時期、用途とも不明である。

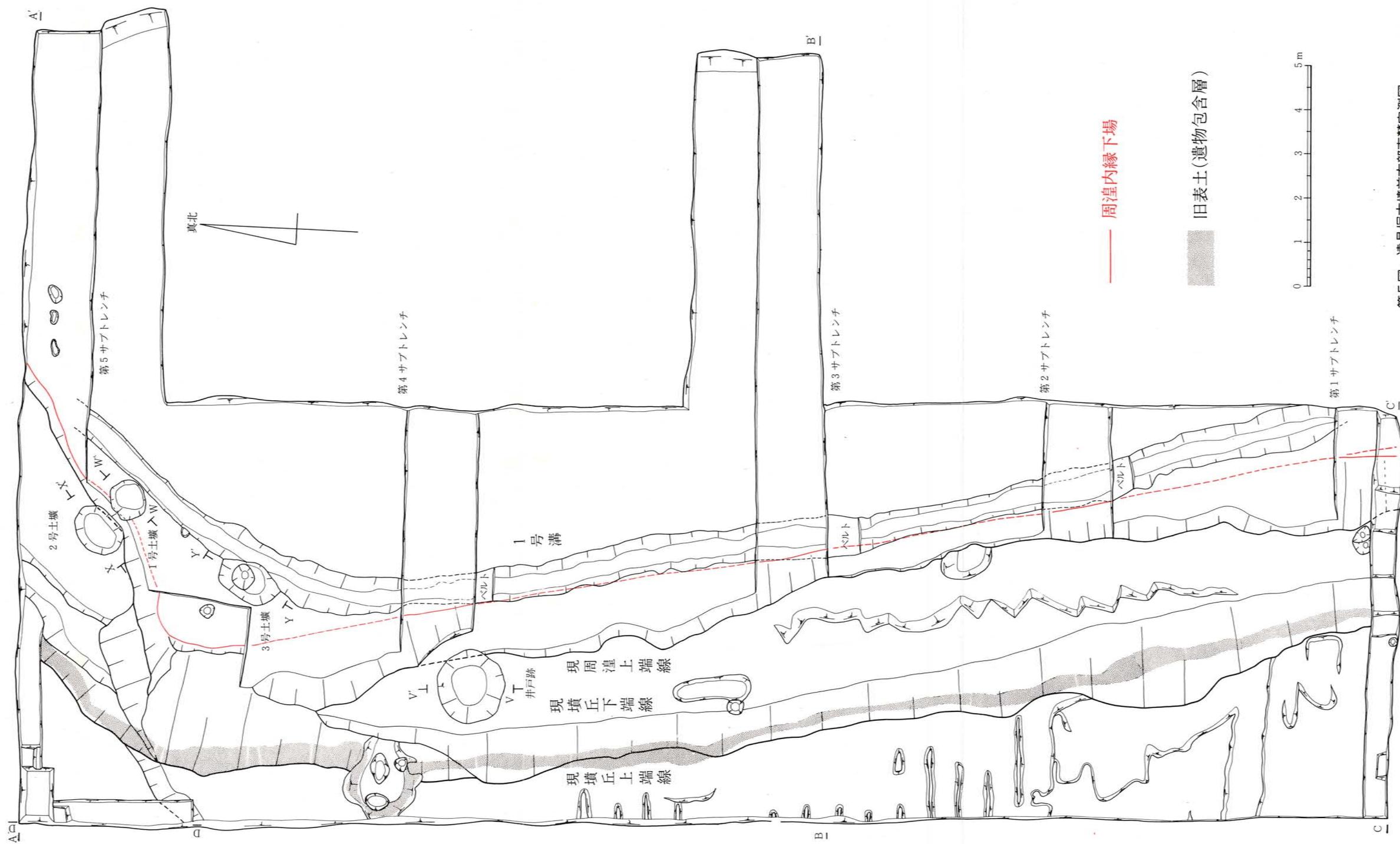
(3号土壙) 長軸140cm、短軸90cmの略楕円形で2段の掘り込みがあり、下段で深さ90cmを計る。1号溝より古い時期のものである。

V. 出土遺物

本調査においては、多数の弥生土器片、土師器片、石器、および少数の須恵器片が出土した。これらの詳細については本報告に譲り、本書では、代表的なものを選んで報告することにした。

1. 突帯のある土師器

周湟堆積土中および墳丘崩壊土中には弥生土器片と土師器片が混在して出土したが、この土師器の中に第10図9から14に図示したような突帯を有する土師器の口縁部が9点出土した。頸部と口縁部の境に幅の広い隆帯が巡り、その隆帯上から口唇部にかけて断面三角形の突帯が縦に



第5図 遠見塚古墳前方部東麓実測図

貼り付けられている。口唇部の破片9・10は、突帯が口唇の外に山形に突出している。いずれも小破片であるため、突帯の単位は不明であるが、三本の突帯を確認できるものが7点ある。昭和50年度の周溝調査の際には4本の突帯が付いたものも出土している。9・10と他3点には外面に朱塗りの痕跡がある。外面調整は斜方向にハケメ調整され、突帯の両側はナデられている。内面はヘラナデ、ナデにより調整されている。塩釜式の複合口縁の壺の口縁部片と考えられる。

2. 弥生土器

弥生土器も多数出土したがいずれも小破片で、器形の明らかなものはない。型式としては枡形囲式（第9図1～6、8～15）円田式（第9図16～17）桜井I式（第9図18、第10図1～4）桜井II式（第10図5～8）がある。（註一）

第9図1は車輪状の蓋で、中央に直径1.1cmの孔と、縁辺に直径4mmの孔を穿っている。縁辺のものは対称の位置にも対となつてあると考えられる。表面は、細かな縄文を施した後、細い沈線で縁辺から中心まで上下左右から「く」字を繰り返すことによって区画し、区画内を一つ置きに摩消して文様を構成している。裏面はナデによる。本品は、枡形囲式の落蓋として非常に珍しいものである。

第9図2は甕の破片で、内湾した体部上半に「く」字に外反する口縁がつく。口縁部には、外面に3条の沈線、内面には2条の沈線が巡り、肩部外面にも3条の沈線が巡る。口唇部には対の山形突起がある。体部の主文様は、錨形の文様と考えられる。

3. 石器

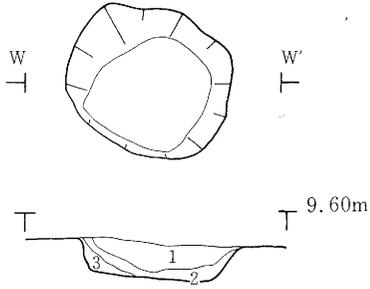
石器類はほとんどが剥片（調整痕のあるものを含む）である。剥片に混って、石錐、石鏃、スクレイパー、磨製石斧、凹石等が出土した。

第10図に示したように、石錐には棒状のものとスプーン形の二種があり、石鏃には流線形のものと同型二種がある。スクレイパーは石匙に近い形のものである。石器の材質は流紋岩が多く、他に頁岩、珪岩、黒曜石、粘板岩がある。

註一 氏家和典「東北における大型古墳の企画性と編年」『東北歴史資料館研究紀要第4巻』（昭和53年3月）

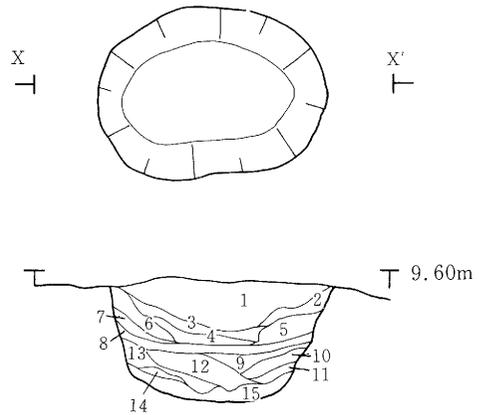
註二 馬目順一「入門講座・弥生土器—南東北1～⑤」月刊考古学ジャーナル No.148、No.151、No.154、No.156（1978）、No.159（1979）

1号土壤



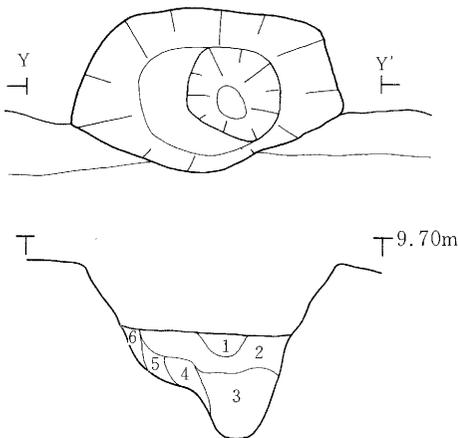
層位	土色	土性	その他
1	10Y R 弱黒褐色	粘土質シルト	マンガン粒を少量含む、土器片を含む
2	10Y R 弱黒褐色	粘土質シルト	黄褐色シルト粘土を多量に含み、粘性強い。
3	10Y R 弱褐色	粘土質シルト	マンガン粒・灰黄褐色土のブロックを含む。

2号土壤



層位	土色	土性	その他
1	10Y R 弱黒褐色	シルト	黄褐色シルトをブロック状に含む。
2	10Y R 弱黒褐色	粘土質シルト	マンガンを少量含む。
3	10Y R 弱暗褐色	粘土質シルト	黄褐色シルト粒を少量含む。
4	10Y R 弱黒褐色	粘土質シルト	2層に類似するがやや明るい。
5	10Y R 弱灰黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄を含む、しまり強い。
6	10Y R 弱暗褐色	粘土質シルト	3層に類似
7	10Y R 弱黒褐色	粘土質シルト	マンガンをおずかに含む
8	10Y R 弱灰黄褐色	シルト	水分を多量に含む。
9	10Y R 弱灰黄褐色	シルト質粘土	
10	10Y R 弱にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄を含む土を粒状に含む。
11	10Y R 弱黒褐色	粘土質シルト	黄褐色土粒を多量に含む。
12	10Y R 弱暗褐色	シルト	水分を多く含む。
13	10Y R 弱にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄を含む。
14	10Y R 弱灰黄褐色	シルト質粘土	
15	10Y R 弱黒褐色	粘土質シルト	黄褐色土を含む。

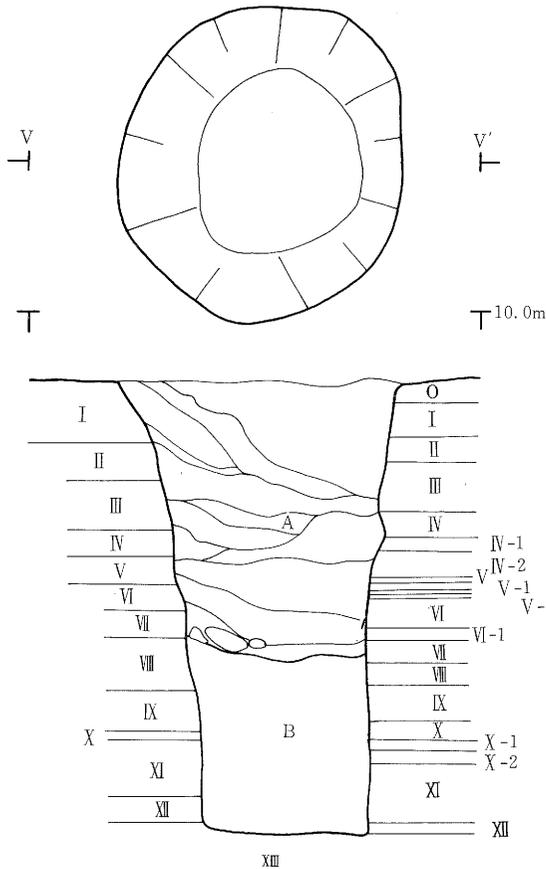
3号土壤



層位	土色	土性	その他
1	10Y R 弱褐色	シルト質粘土	酸化鉄を含む。
2	7.5Y R 弱褐色	シルト質粘土	酸化鉄を含む。
3	10Y R 弱暗褐色	シルト質粘土	褐色土及び、酸化鉄を含む。
4	10Y R 弱褐色	粘土	酸化シルトのブロックを含む。
5	10Y R 弱暗褐色	シルト質粘土	酸化鉄・炭化物を含む。
6	10Y R 弱暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄を多く含む。



第6図 土壤実測図



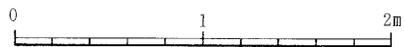
第7図 井戸跡実測図

井戸内堆積土註記

層位	土色	土性	その他
A	黒褐色～褐色の砂質シルトおよび粘土の人為的堆積土		
B	褐色砂質シルトの自然崩落土層		

井戸壁（地山）土層註記

層位	土色	土性	その他
O	10Y R 灰褐色	砂質シルト	シマリ強い、酸化鉄を含む。
I	10Y R 灰黄褐色	砂質シルト	シマリ弱い。
II	10Y R 灰褐色	砂質シルト	
III	10Y R 灰褐色	砂質シルト	少量の炭化物を含む。
IV	10Y R 灰褐色	砂質シルト	少量の炭化物を含む。
IV-1	10Y R 灰に多い黄褐色	砂質シルト	少量の炭化物粒を含む。
IV-2	10Y R 灰に多い黄褐色	砂質シルト	少量の炭化物粒を含む。
V	10Y R 灰褐色	シルト質粘土	
V-1	10Y R 灰褐色	粘土質シルト	
V-2	10Y R 灰黄褐色	粘土	
V-3	10Y R 灰黄褐色	砂質シルト	
VI	10Y R 灰黄褐色	砂質シルト	褐色粘土をブロック状に含む。
VI-1	10Y R 灰黄褐色	砂質シルト	炭化物粒をわずかに含む。
VII	10Y R 灰褐色	シルト質粘土	
VIII	10Y R 灰褐色	粘土質シルト	褐色粘土の小ブロックを含む。
IX	10Y R 灰に多い黄褐色	シルト	
X	10Y R 灰明黄褐色	粘土質シルト	
X-1	10Y R 灰黄褐色	砂	炭化物粒を微量含む。
X-2	10Y R 灰黄褐色	砂質シルト	粘土をブロック状に含む。
XI	10Y R 灰黄褐色	砂	
XII	10Y R 灰に多い黄褐色	シルト質砂	酸化鉄を含む。
XIII	10Y R 灰に多い黄褐色	砂	隙



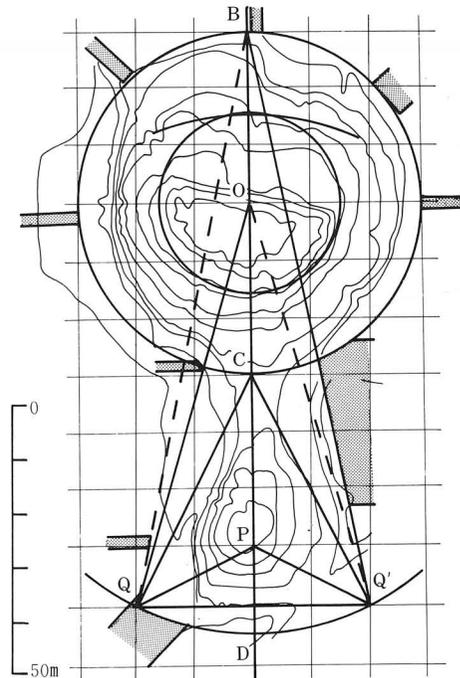
VI. まとめと考察

本年度に行なった遠見塚古墳第5次調査は、前方部墳麓線の確定を目的として調査を実施したが、これにより次のことが考えられる。

- ① 前方部東麓も古墳の他の部分と同様に墳丘上面及び斜面が、畑作、水田耕作により削平を受けている。
- ② 現存の前方部墳丘上端線は、地表面での上端より1～1.5m程中軸線に寄っている。また

前方部墳丘上端線と周濠の上端線とは一致せず、周濠は墳丘上面より一段低い削平により生じた平坦面を上端としており、この間は2～3m離れている。

- ③ くびれ部の状況からすれば、前方部は周濠底面から墳丘上面までスムーズな立ち上がりをもっていたものと考えられる。
- ④ 第1～第4サブトレンチ、及びくびれ部周濠内縁下端線は一直線上に並び、その延長線は後円部北端の中軸線付近で交わる。この下端線は第3次調査成果の墳形線の50～100cm東に平行し、第3次調査時に平坦面の周濠上端線の確認によって考えた墳形線が正しかったことを立証した。
- ⑤ 古墳造築後の周濠内縁下端線は、周濠底面が平坦なことにより、墳丘斜面からの崩落土の堆積による保護層ができ、墳丘斜面のどの部分よりも保存が良いと考えられる。従って④の結果の信頼性は高いものといえる。



第8図 古墳の企画

- ⑥ 周濠内縁下端線と、墳丘を水平に切断して出来た角の線（削平による平坦面での現周濠上場線）とは本来、平行もしくはそれに近い直線となるのであるが、現周濠上端線は、第2サブトレンチと第3サブトレンチの間で東側に大きく脹むほかに、大小の凹凸が観察される。これは、造築時からそうであったのではなく、墳丘斜面（調査部は地山部である）の崩壊状態の差によるものと考えるのが妥当であろう。
- ⑦ 従って、墳形を崩壊状態の異なる墳丘斜面で考えるより、比較的保存の良好な周濠の下場で考えるのが適切と考えられる。また、幅の狭いトレンチによる調査の場合ほど、崩壊状態の差により判断を誤まる可能性が強い。昭和50年度の第1次調査の結果による前方部西側墳麓線の延長線は後円部の中心で交わった。これは西側のくびれ部に入れた第2トレンチで確認された上端が、大きく内側に入り込んだためであるが、あるいはこの部分が、最大3.6mと深いために崩壊が著しく、しかもトレンチが狭くて保存良好部分を検出できなかったことにより、前記の結果となった可能性も考えられる。
- ⑧ 前方部東麓でも10～30cmの弥生式土器と石器を多量に包含する旧表土層が確認された。古墳積土の下には弥生式土器を多量に包含する層が残されている。

- ⑨ 古墳寄りの周湟中より、南小泉遺跡でもあまり例をみない突帯を有する大型の壺の口縁部が数多く出土した。

本調査の成果は以上のようにまとめられる。

参 考 文 献

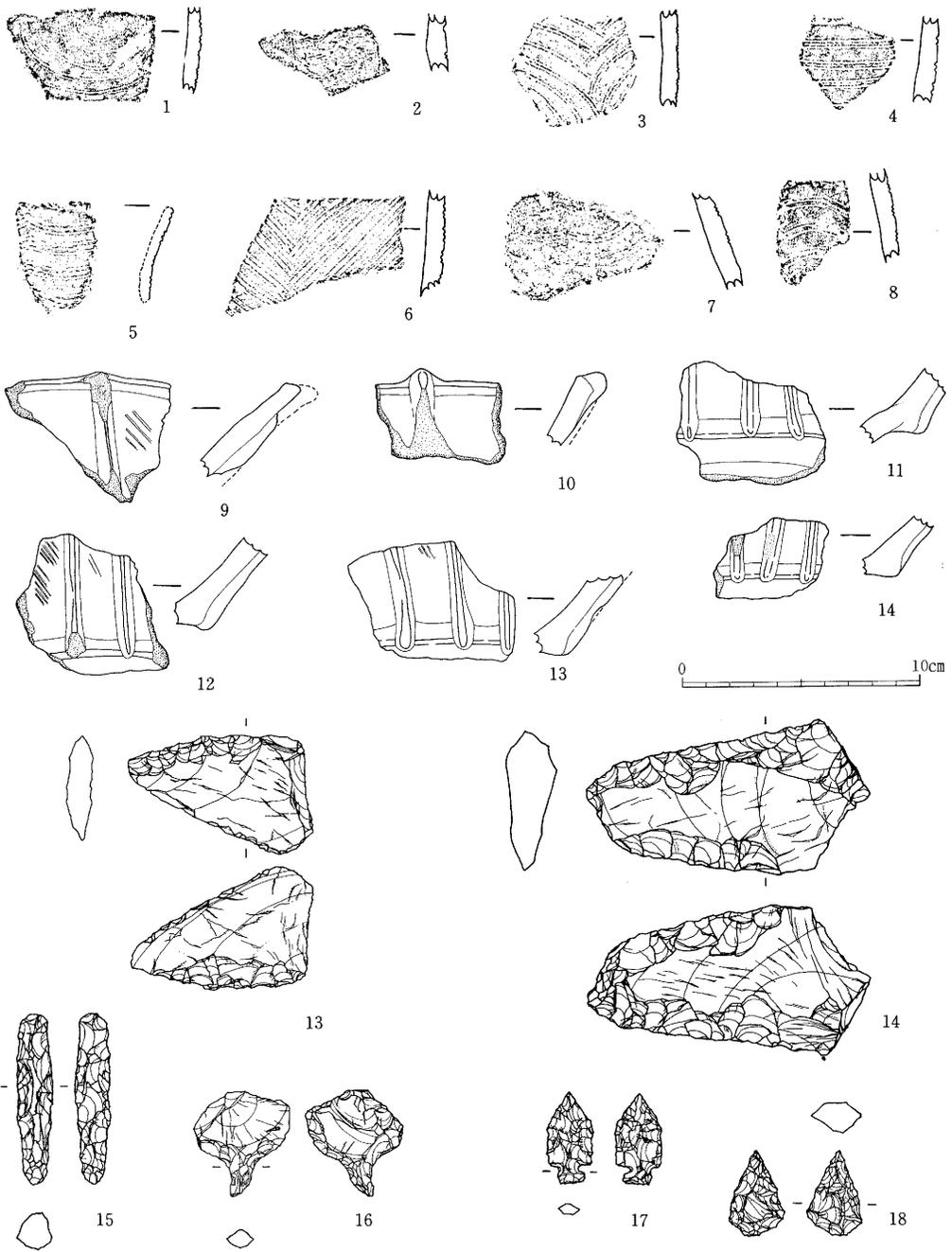
1. 奥津春生「大仙台圏の地盤、地下水」昭和48年1月
2. 伊東信雄「遠見塚古墳」『宮城県文化財調査報告書第1集』（昭和25年）
3. 仙台市教育委員会「昭和50年度史跡遠見塚古墳環境整備第2次予備調査概報」『仙台市文化財調査報告書第11集』（昭和51年3月）
4. 仙台市教育委員会「昭和51年度史跡遠見塚古墳環境整備第2次予備調査概報」『仙台市文化財調査報告書第12集』（昭和52年3月）
5. 仙台市教育委員会「南小泉遺跡」『仙台市文化財調査報告書第13集』（昭和53年3月）
6. 仙台市教育委員会「昭和53年度史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報」『仙台市文化財調査報告書第15集』（昭和54年3月）
7. 仙台市教育委員会「昭和54年度史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報」『仙台市文化財調査報告書第20集』（昭和55年3月）
8. 氏家和典「東北における大型古墳の企画性と編年」『東北歴史資料館研究紀要第4巻』（昭和53年3月）
9. 氏家和典「東北における大型古墳の問題」『東北の考古、歴史論集』（昭和49年11月）



- 1 ~ 6 柘形圀式
 8 ~ 15
 16 ~ 17 円田式
 18 桜井I式

0 10cm

第9図 出土遺物実測図・拓影(弥生土器)



- 1~4 桜井Ⅰ式 13~14 スクレイパー
 5~8 桜井Ⅱ式 15~16 石 錐
 9~12 突帯のある土師器(口縁) 17~18 石 鏃

第10図 出土遺物実測図・拓影 (弥生土器・土師器・石器)





古墳全景 (東より)



調査区全景 (南より)



調査区全景 (北より)

くびれ部 (南より)



くびれ部 (東より)



第2サブトレンチ
周隴セクション(北より)

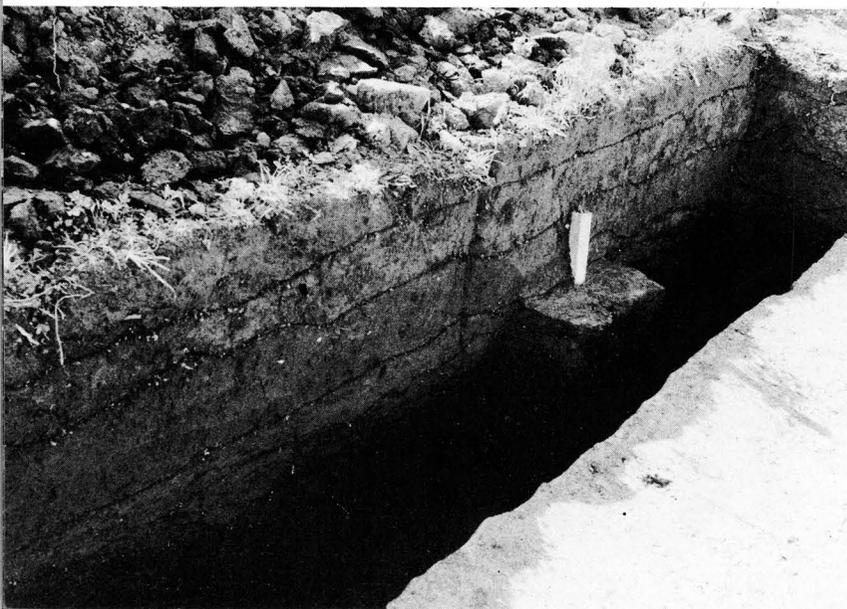




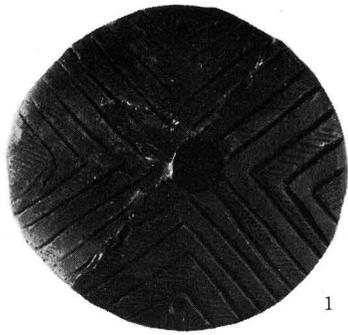
第3サブトレンチ
周湟セクション(北東より)



第1サブトレンチ(東側)
周湟～墳丘セクション
(北西より)



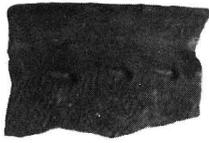
第1サブトレンチ(西側)
墳丘・旧表土セクション
(北東より)



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



21



22



15



16



23



24



17



18



19



20



25



26

1~5 栞形開式
6~7 円田式
8~11 桜井I式
12~14 桜井II式

15~16 スクレイパー
17~18 石 錐
19~20 石 鏃
21~26 突帯のある土師器
(口縁部)

出土遺物写真

職 員 録

社会教育課
課長 永野 昌一
主幹 早坂 春一

文化財管理係

係長 鈴木 昭三郎
主査 鈴木 高文
主事 山口 宏
〃 渡辺 洋一

文化財調査係

係長(兼) 早坂 春一
教諭 加藤 正範
主事 田中 則和
〃 結城 慎一
〃 柳沢 みどり
教諭 青沼 一民
主事 木村 浩二
〃 篠原 信彦
〃 佐藤 洋
〃 金森 安孝
〃 佐藤 甲二
〃 工藤 哲司
〃 渡部 弘美
〃 主浜 光朗
〃 斎野 裕彦
〃 吉岡 恭平

仙台市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 天然記念物霊屋下セコイヤ化石林調査報告書(昭和39年4月)
第2集 仙 台 城(昭和42年3月)
第3集 仙台市燕沢善応寺横穴古墳群調査報告書(昭和35年3月)
第4集 史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書(昭和44年3月)
第5集 仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書(昭和47年8月)
第6集 仙台市荒巻五本松竈跡発掘調査報告書(昭和48年10月)
第7集 仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書(昭和49年3月)
第8集 仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書(昭和49年5月)
第9集 仙台市根岸町宗禅寺横穴群発掘調査報告書(昭和51年3月)
第10集 仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報(昭和51年3月)
第11集 史跡遠見塚古墳環境整備調査概報(昭和51年3月)
第12集 史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報(昭和52年3月)
第13集 南小泉遺跡一範圍確認調査報告書一(昭和53年3月)
第14集 栗遺跡発掘調査報告書(昭和54年3月)
第15集 史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報(昭和54年3月)
第16集 六反田遺跡発掘調査(第2・3次)のあらまし(昭和54年3月)
第17集 北屋敷遺跡(昭和54年3月)
第18集 栢江遺跡発掘調査報告書(昭和55年3月)
第19集 仙台市地下鉄関係分布調査報告書(昭和55年3月)
第20集 史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報(昭和55年3月)
第21集 仙台市開発関係遺跡調査報告I(昭和55年3月)
第22集 経ヶ峯(昭和55年3月)
第23集 年 報 I(昭和55年3月)
第24集 今泉城跡発掘調査報告書(昭和55年8月)
第25集 三神峯遺跡発掘調査報告書(昭和55年12月)
第26集 史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備調査概報(昭和56年3月)
第27集 史跡陸奥国分寺跡昭和55年度環境整備調査概報
東門跡(昭和56年3月)

(1月1日採用)

仙台市文化財調査報告書第26集

昭和55年度

史跡遠見塚古墳

昭和56年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市国分町3-7-1

仙台市教育委員会社会教育課

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市立町24-24 TEL 63-1166



文化財保護シンボルマーク